文学部ニュース

NO1

1969 4.14.

全共闘
文学部闘争委員会

全ての学友諸君！新入生諸君！

先日、我々の信頼出来る同志な、戦斗的な活動家A君が、午後十二時から八時まで、八時間にわたる、日共＝民青からのリンチを受けた。我々が、キャンパスで集会を開いているとき、そして彼らが新入生に向って「民主立命」と呼びつけている之き、研心館の地下BOX・では陰湿な暴力が行なわれていたのだ。

我々は、我々の斗争において日共＝民青に対して、彼らが言うように「甘っかった」ことを自己批判的に総括し、ここに内外にわたって戦斗宣言を発っする。

昨年末の日共＝民青学友会の暴力的介入による新聞社事件、今年に入ってからの現在化した斗争を直接的契機として、一貫して斗ってきた我々の斗争は一体何を我々に提起し、同時に学園当局に問うてきたのか。立命館大学には教学の理念、理念である「平和と民主主義」の実体、学問、研究が一時たりとも存在していたのか。我々はそれにたいしては、ノン、を言う以外にはなかった。そして、それは個々人、学生にわたって立命館大学学生として常次、生活していた自己に対する、ノン、でもなければならなかった。なぜなら、我々自身が「民主立命」にのっかかって存在し、それを再生産していたのだ！

新入生諸君！君達の中には我々＝全共斗と日共＝民青諸君とは現在の情勢（＝資本制社会）を否定する点に於て一致するものではないか、という感覚を持っている人が多くいるだろう。この点について考えてみよう。

まず極東的に云えば、両者に異なるということ。

彼等民青諸君は常に自己を教育者としての外観を装う。（体制から御庄を

牧師外されている－基本的には正しいところが現実的には、彼等自身が加害者でもあるのだ。前にも述べたように現在我々学生として存在する限り、現体制を維持しているのだ。そのことは現帝国主義体制に於ける大学の位置＝労働力商品再生産工場（東大、京大の場合＝官僚養成の場、立命、日大＝中級サラリーマン養成の場）によって明白である。このことを認識できない民青諸君の行動は一般的、学校当局と一体化して常に自己が学生である様和い？ことを毎る。即ち現状維持＝斗争圧殺でしか出現しないのだ。東大斗争を見たまえ。東大斗争はすでに昨年2月には始まっているのだ。6月の安田和学生館の時にでっている態度をとったのか。今年の一月には国家権力＝機動隊に導入されても大学当局集会をデッチ上げ、安田講堂の攻防戦にはどこで何をしていたというのだ……。

立命館においては、中川会館封鎖＝紛争という事実をたて、裏部状態の文学部の状況を一切無視して入試を積極的に支持し、学校当局のサギの先ボウをなっていたのではないか……。

このように基本的立場の違う民青諸君には現在なぜ大学紛争が起こるのかということは一切理解できないだろう。

全ての新入生諸君！民青諸君！

君達は現在なぜ大学紛争が起こるのか、自分自身にとって何なのか、学問とは自分自身にとって何なのか、学問とは、大学とは何なのかをもう一度、自分自身の問題としてとらえなおしてほしい。君自身が人間として再生するためにも、政治的に目ざめるのだ。

全ての斗う学友よ
文斗委の旗の下結集せよ！